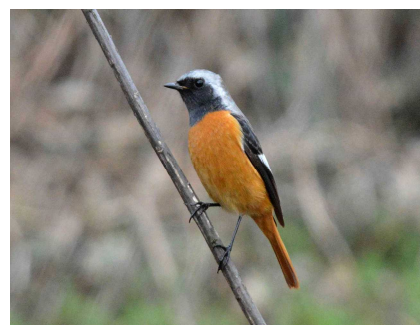


## 特徴が分かる別名

### 1. ジョウビタキ

木枯らし1号が吹くと、翌日に姿を見せる鳥です。北西の季節風によって渡来するのでしょうか。ヒタキと呼ばれる仲間は「火焚き」の意味で、カッ、カッという鳴き声が火打石を打つ音を連想したものといわれています。地鳴きという鳴き方で、ヒッ、ヒッの方が多いのですが、カッ、カッも混ぜます。この特徴的な鳴き声で遠くからでも存在に気付くのですが、打吹山ではルリビタキも同じような声なので、識別は慣れていないと難しいでしょう。



ジョウビタキの雄



ジョウビタキの雌

ジョウビタキのジョウは、雄の頭部が「尉」(じょう:能でいう老人の男性)の白髪頭を思わせるところからきたものです。雌と色彩が大きく異なりますが、翼の白斑は雌雄共通です。よく目立つことからモンツキドリとも呼ばれます。倉吉ではヤマノカミ(山の神)とよびます。尾を上下しながら時々ぴよこんと頭を下げる仕草を見て、日々、我が家の山の神に頭の上がない男性が名付けたのでしょうか。

人をあまり恐れず、近づける鳥です。冬期は個体毎にナワバリを持ち、ほぼ決まった場所をパトロールしていますが、4月の渡去前には集まてきます。

### 2. シャシャンポ

スノキの仲間(ブルーベリーも)の、低木で、アントシアニンに富んだ食べられる実が付きます。熟す時期は10月末のナツハゼより1ヶ月くらい遅れます。スノキやナツハゼは落葉性ですが、シャシャンポは常緑です。乾燥した場所に生えるため、長谷の八十八ヶ所や打吹山の南面に多くみられます。実がなるためには日当たりが必要で、樹林内に生えている木は結実しません。房となって結実し、夏は葉と同じ緑色をしています。種子が成熟する



シャシャンポの成熟した果実



未成熟な果実

と黒紫色となり、甘酸っぱく美味しくなります。鳥にとっても目につくようになり、食べられることで糞とともに種子を散布してもらいます。

倉吉周辺ではセンダラシブとよび、子どもの食べ物でした。ナツハゼの実より小さく、墓に供えるシブ(標準和名ヒサカキ)の実と比較したのでしょうか。果実の頂部に河童の頭のような萼(がく)の痕が残るところはナツハゼと同じなのですが、ナツハゼの方はこの特徴を捉えて、倉吉では「アタマハゲ」と呼びます。

シャシャンポの語源は、『牧野新日本植物図鑑』では「小小坊」の訛ったものとしてありますが、諸説あるようです。